

I 次の文章を読んで、後の問い(問1～14)に答えよ。(配点 50)

### 人間と関わるロボット

人間と関わるロボットの研究は、従来のロボット研究とは異なり、根本的な難しさを持つ。それは、I が予測不能な存在だからだ。

人間の行動は実に多様である。その多様な行動をすべてあらかじめ想定して、行動の一つ一つに対するII の動作を決定しておくことは不可能である。

工場で働くロボットでは、まわりの人間など不確定な要素をすべて取り払ったところで、ロボットが活動する環境を整え、III のタスクを決める。一方で、日常生活において、まわりの人間を排除することはできない。日常生活とは、IV が活動する場であり、そこで働くものはロボットでも人間でも、V を意識する必要がある。すなわち、「人間と関わる機能」を作ることが、研究の中心的な課題になる。この研究を、人間とロボットの相互作用(ヒューマン・ロボットインタラクション)と呼ぶ。

この「A人間と関わるロボット」の研究開発のもっとも大きな特徴は、ロボットの開発と人間についての理解を同時に進めなければならないという点である。

人間に関して完全な知識を持たなくても、人間が利用できる機械を作ることができる。たとえば横長テレビは、人間の特性を最初から**a**コウリョとして設計されたのだろうか。テレビの幅を偶然横長にしてみて、**b**リンジヨウカンが出ることに気づき、あとから人間の視覚特性を改めて調べ直した可能性もある。

パソコンのマウスやキーボードも同じだ。とりあえず情報を入力する手段は必要なわけで、そのために、いろいろな形や機能を試してみた可能性もある。

そのようにしているうちに、ある特定の形が多くの人に受け入れられて、その製品がたくさん売れるようになる。そうになると、その形には人間の何かに**c**ウツタえるものがあるはずだ、人間の特性を反映しているはずだと考えて、改めて人間の性質を調べてみることになる。

### インターネットとロボット

さらに典型的な例がインターネットである。インターネットは、メールやウェブの機能によって、急速に世界的に普及した。しかし、どうして人間はネットをそれほどまでに好むのか? ウェブによる情報共有がそれほど便利なのか? それによって人間社会が変わったのは、人間の持つどのような性質に基づくのか?

言いたいことは、これまでのロボット工学の常識であれば、まずは環境やタスクに関する完全な知識を準備して、その知識の範囲でロボットを設計して動かすというアプローチをとってきた。けれども、人間を含む環境がよく分からなくても、ロボットを作ることにはできる。すなわち、

「ア」

ということである。

もう少し説明を加えると、インターネットや携帯電話など、人間に利用され、社会を変えていく新しい技術は、人間に関する完全な知識なしに、設計され、普及する。その普及によって、人間の新しい性質が発見され、発見された性質は再度製品の設計にフィードバックされる。

「イ」

のである。言い方を換えれば、生活上の強いニーズから生じた冷蔵庫や洗濯機などの開発とは異なり、インターネットや携帯電話に象徴される新しい技術開発は、それ自身が人間理解を伴うものになっている。人と関わるロボットも、インターネットと同様である。

実際、人と関わり、人とコミュニケーションできるロボットは、ここ四、五年のうちに、多くの企業でプロトタイプが試作され、いくつものショッピングモールで実証実験が続けられている。そのような実証実験を繰り返しつつ、人々の反応を見ながらロボットを改良していこうとしているのである。

そのような意味で、ロボットの技術開発は、社会の変革を伴いながら普及するインターネットと同様に、人間理解を伴う技術開発なのである。認知科学や心理学における人間の知識をヒントに、ロボット工学やセンサ工学の技術者がロボットを作る。ロボットを作るには、むしろヒントだけでは不十分で、システムを構成する際には、工学的な知識を加える。認知科学や心理学には、人間はこのような機能を持っているという **X** な知識は数多くあるが、それらをつなぎ合わせてどのような仕組みになっているかという、システム構成に関する知識はほとんどない。その足りない部分を、技術開発では **Y** な知識で補い、実際にカドウするシステムに仕上げるのである。

このようにして開発されたロボットは、人間社会でその性能を試される。ロボットが高い性能を示せば、それは、そこで応用された認知科学や心理学の知識が正しかったこと、さらには付け加えた工学的なシステム構成仮説が正しかったことを裏付ける。すなわち、ロボットを使って、認知科学や心理学も進化していくのである。

認知科学や心理学が進化すれば、また新たな知識が得られ、それをもとに、ロボットはさらに改良される。ロボットを開発することは、単なる技術開発ではなく人間を理解するための技術開発なのである。

### 人間理解のための技術開発

このような技術開発は、何もロボットだけに起きていることではない。先にテレビの例を挙げたように、本来、我々が日常生活で利用するほとんどの製品は、同様の側面を持つ。完全な製品はなく、常に人々の評価にさらされ、改良され続けていく。

では、そのような製品作りのアイデアはどこから来るのだろうか？ もちろん人の中から出てくるのである。人が人にとって便利なものを作る。その便利なものとは、本来人が行ってきた作業を肩がわりしてくれるものである。言うなれば、

というのが人間の営みではないか。その営みは、ひいては次のように言い換えられるかもしれない。

「人間はすべての能力を機械に置き換えた後に、何が残るかを見ようとしている」

ロボットは、そのような、「人間を理解したい」という根源的欲求を満たす格好の道具である。人類は、新しい革新的技術を手に入れるたびに、それをロボットの形にしてきた。我々はあえて意識してこなかったが、常に、技術開発を通して人間を理解しようとしてきたのである。そう考えれば、ロボット開発が人間理解と結びつくという考えは、特段新しいものではない。これまで繰り返し返されてきた営みと同じである（なお、ここでの「ロボット」とは、冷蔵庫やテレビのような家電製品を含む「広義のロボット」を意味する）。

おそらく異なるのは、先に述べたように認知科学、心理学、脳科学といった分野と、ロボットの技術開発が密に結びつくようになってきたことである。認知科学や心理学は、これまで独自の方法を確立してきた。ゆえに、これまでは、技術開発と深く結びつくことはなかった。しかしながら、ロボット研究が進み、人間らしいロボットを作り出せるようになると、これらの分野の研究者もロボットに強い興味を持つようになってきた。

ところで心理学や認知科学の実験では、さまざまな道具が用いられる。たとえば、ペグインーホールという実験では棒（ペグ）を使う。これは、ワシントン州立大学の心理学者メルゾフが考えた実験で、人間が棒を穴に差す様子を子供に見せた場合と、機械が棒を穴に差す様子を見せた場合とを比較するというものである。結果は、人間が棒を穴に差した場合には、子供はまねをする<sup>D</sup>が、機械の場合はまねをしない。子供はまねをする対象に、人間らしさを求めるのである。

そこで、ロボットを道具として同じように利用するとどうなるだろうか？

私は以前、板倉昭二氏（京都大学）とともに、著者らが開発したロボットを機械のかわりに用いて、このペグインーホールの実験を行ってみた。その結果、子供は、ロボットの場合にもまねをしたのである。このとき子供は、ロボットにある程度の人間らしさを感じていた可能性がある。

このようにロボットは、心理学や認知科学の一種の道具として使われていくのではないか。それによってその方法論も、ひいては変えていくのではないか。

### なぜ人間型ロボットなのか？

ここで「なぜ私が人間型ロボットを作るのか。人間型ロボットにこだわるのか」を説明しておく。

人間型ロボットとその他のロボットの違いは、まず第一にその見かけにある。前者は、頭や手があり、いわゆる人間らしい見かけを持っている。必ずしも人間そっくりである必要はない。顔のよくなものや手のよくなものが、人間と似たようなバランスで備え付けられていればいい。

もっとも大きな違いは、先に述べたように、そのロボットがいる環境に人間が存在するかどうかである。ゆえに、人間型ロボットの研究において、もっとも重要なテーマは「人との関わり」であ

る。

そして、この「人との関わり」において、

「工」

人間は本来、対話の対象を擬人化する傾向を持つという、非常に強い脳の機能を備えている。たとえば、人間は、ヤカンにさえ話しかけることができるが、話しかける際には「どこに鼻がおりどこに目があるか」を無意識のうちに想像している。

ロボットは、一種のメディアである。右に述べた人間本来の脳の性質にカンガみれば、擬人化しやすい人間型ロボットが、他のメディアよりも親しみやすいメディアとなることは、容易に想像できる。

端的に言えば、人間の脳は、パソコンの画面を見たり、キーボードを操作したりするように設計されているというよりは、他の人間を認識し、人間と関わるために設計されていると断言していいだろう。ゆえに、人間型ロボットは、パソコンや携帯電話を超えた、万人が受け入れることができるメディアになる可能性がある。子供からお年寄りまで、パソコンは使えなくても、人間型ロボットには自然に話しかけることができるのである。

現在、我々は、パソコンや携帯電話を介して、インターネットから情報を受信し、さらに、送信もしている。しかしながら、キーボードを使いこなせない人たちにとっては、非常にとっつきにくいメディアとなっている。もし、人間のように人間と関わる人間型ロボットが開発できれば、それは、パソコンや携帯電話に並ぶコミュニケーション手段として、必要不可欠なものになる可能性があるのである。

石黒浩「ロボットとは何か」(講談社 2009年)

(注) プロトタイプ：試作品。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a ～ e のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は  ～  。

a コウリョ

b リンジョウカン

c ウツタ

d カドウ

e カンガ

問2

空欄

～

に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の

①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は  。

① I—人間

II—ロボット

III—ロボット

IV—人間

V—人間

② I—人間

II—ロボット

III—人間

IV—人間

V—人間

③ I—人間

II—人間

III—ロボット

IV—ロボット

V—ロボット

④ I—人間

II—人間

III—人間

IV—ロボット

V—ロボット

⑤ I—ロボット

II—ロボット

III—ロボット

IV—人間

V—人間

⑥ I—ロボット

II—ロボット

III—人間

IV—人間

V—人間

⑦ I—ロボット

II—人間

III—ロボット

IV—人間

V—ロボット

⑧ I—ロボット

II—人間

III—人間

IV—人間

V—ロボット

問3

空欄

に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解

答番号は  。

① 一元的

② 総合的

③ 補足的

④ 抽象的

⑤ 集合的

⑥ 断片的

⑦ 形成的

⑧ 試験的

問4

空欄

に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解

答番号は  。

① 工学的

② 人文学的

③ 心理学的

④ 経済学的

⑤ 倫理的

⑥ 社会学的

⑦ 社会科学的

⑧ 認知科学的

問5 空欄

ア

一つ選べ。解答番号は

9

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

- ① 環境がよく分からなくても、人が進化する物を作ることは可能である
- ② 環境がよく分からなくても、人が理解する物を作ることは可能である
- ③ 環境がよく分からなくても、人が設計する物を作ることは可能である
- ④ 人間がよく分からなくても、人が入力する物を作ることは可能である
- ⑤ 人間がよく分からなくても、人が利用する物を作ることは可能である
- ⑥ 人間がよく分からなくても、人が模倣する物を作ることは可能である

問6 空欄

イ

一つ選べ。解答番号は

10

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

- ① 製品の改良と人間に対する反応が同時に進行する
- ② 製品の改良と人間に対する理解が同時に進行する
- ③ 製品の設計と人間に対する反省が同時に進行する
- ④ 製品の設計と人間に対する変革が同時に進行する
- ⑤ 製品の利用と人間に対する反感が同時に進行する
- ⑥ 製品の利用と人間に対する実証が同時に進行する

問7 空欄

ウ

一つ選べ。解答番号は

11

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

- ① 製品作りを通して人の評価を機械に置き換えている
- ② 製品作りを通して人の内面を機械に置き換えている
- ③ 製品作りを通して人の業務を機械に置き換えている
- ④ 技術開発を通して人の利便を機械に置き換えている
- ⑤ 技術開発を通して人の能力を機械に置き換えている
- ⑥ 技術開発を通して人の営業を機械に置き換えている

問8 空欄

工

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 人間型ロボットは、心理学や認知科学との結びつきがあるため、より優れている
- ② 人間型ロボットは、人間と似たようなバランスを備える点で、より優れている
- ③ 人間型ロボットは、人間と対話ができるという点で、より優れている
- ④ 人間型ロボットは、人間の存在を感じさせるため、より優れている
- ⑤ 人間型ロボットは、他のメディアと比較したとき、より優れている
- ⑥ 人間型ロボットは、脳が人間と同じという点で、より優れている

問9 傍線部A「『人と関わるロボット』の研究開発のもっとも大きな特徴」の説明として最も適

当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 環境やタスクに関する完全な知識を準備して、その知識の範囲でロボットを設計するため、人間がおかれた環境を完全に理解する必要があること。
- ② 人間と関わるロボットの研究は、人間の生き様と密接に関係するため、人間の根源に迫るという難しさがあること。
- ③ ある特定の製品がたくさん売れたときに、なぜ売れたのか、消費者の動向を分析し、その時代のニーズにあった製品を展開する必要があること。
- ④ 横長テレビの画面幅がたまたま人間の視覚特性に合った結果、多くの人に受け入れられたように、偶然の気づきを見落としてはならないということ。
- ⑤ 新技術が人間に関する完全な知識なしに設計された場合でも、その技術の普及によって、人間の特性が見直され、製品設計に反映されるということ。
- ⑥ 開発後のロボットは、自動的に人間の特性に関するデータを集めて改善を試みるため、開発時に人間に関する知識が不完全であっても問題はないということ。



問10 傍線部B「実証実験が続けられている」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **14**。

- ① 人間に利用される新しい技術は、人間に関する完全な知識なしに設計されているため、実験を繰り返すことでその知識を完全にする必要があるから。
- ② 人と関わり、人とコミュニケーションできるロボットは、人々の反応を学習しながら改良するためのデータを収集する必要があるから。
- ③ 時代によって生活上のニーズの強さが変化するため、数年をかけて人々の必要性にあわせてロボットを開発する必要があるから。
- ④ いったん開発した技術の見直しによって、人間の新しい特性を発見し、製品設計にフィードバックする必要があるから。
- ⑤ 冷蔵庫やテレビのような家電製品は日常的に利用するものであるため、数年をかけてその耐久性を調査する必要があるから。
- ⑥ 人が人にとって便利なものを作るのが技術開発であるが、より多くの人のニーズに対応する必要があるので、人々の評価を収集する必要があるから。

問11 傍線部C「ロボットを開発すること」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **15**。

- ① 使用者である消費者理解のため、認知科学や心理学、経済学の知識が必要となること。
- ② 高い性能を目指し、ロボット工学やセンサ工学の技術者だけでシステム構成すること。
- ③ 人間の中からあふれてくる製品作りの考え方にしたがって、ひたすらに創造すること。
- ④ インターネットのように人間理解は伴わず、新しい技術革新を活かして開発すること。
- ⑤ これまで人間が行ってきた仕事を代行する、人間にとって便利なものを作り出すこと。
- ⑥ 新しい革新的技術を認知科学、心理学、脳科学の分野と深く結びつけて形にすること。

問12 傍線部D「ロボットを道具として同じように利用するとどうなるだろうか？」の答えとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **16**。

- ① 棒以外のさまざまな道具を用いた実験でも、子供は機械のまねをするようになった。
- ② 人間が棒を穴に差す場合、子供は模倣するが、ロボットの場合はまねをしなかった。
- ③ 人間が棒を穴に差す実験とロボットが棒を穴に差す実験とは、同じ結果が得られた。
- ④ 機械が棒を穴に差す場合、子供はまねをするが、ロボットの場合はまねをしなかった。
- ⑤ 大人と子供とで実験結果が異なり、ロボットに人間らしさを感じるのは子供だけであった。
- ⑥ 子供はロボットに一定の人間らしさを感じ、ロボット自体に強い興味を示すようになった。



問13

傍線部E「子供からお年寄りまで、パソコンは使えなくても、人間型ロボットには自然に話しかけることができるのである」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① パソコンには鼻や目がついておらず、擬人化は困難だが、人間型ロボットには手や足が付属していて動作が伴うため。
- ② パソコンはキーボードを使いこなせないと親しみが感じられないが、人間型ロボットはキーボードが省略されているため。
- ③ パソコンは音声認識が不十分で会話ができないが、人間型ロボットは人間との会話を自然に行う設計がなされているため。
- ④ パソコンの持つインターネットからの情報を送受信する機能に加え、人間型ロボットはユーザーが操作する楽しさがあるため。
- ⑤ パソコンよりも人間型ロボットは擬人化しやすく、人間と関わるために設計されている人間の脳に親しみやすさを感じさせるため。
- ⑥ パソコンは画面やキーボードというメディアの役割が大きいが、人間型ロボットは人間との関わりを意識した小型設計であるため。

問14

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

18

19

- ① パソコンのマウスやキーボードは、多くの人に受け入れられて広く販売される形や機能を実験結果から確定したうえで普及させており、人間の特性にしたがってデザインされたその形は大きく変化することはない。
- ② インターネットの普及は、メールやウェブの機能という、人間の身体的能力を超えた機能を有していたために人間に好まれたが、最新のロボット研究では情報共有の際は人間らしさに回帰しようという動きがある。
- ③ 人間に利用され、社会を変える新技術は、人間に関する完全な知識なしに設計されたとしても、その技術の普及によって明らかになった人間の特性を再度製品の設計にフィードバックすることで発展している。
- ④ 最新のロボット研究では、開発者がはじめに準備した環境やタスクに関する完全な知識の範囲内でロボットを設計して動かすというアプローチだけで、人間の特性を理解したロボットを作ることに成功している。
- ⑤ 従来のロボット研究とは異なり、最新のロボットの研究では、ロボットと人間が相互に情報提供を行い、より人間の特性に近づけた設計を実現するヒューマン・ロボットインタラクションが重視されている。
- ⑥ ロボットの技術開発では、認知科学や心理学における人間の知識をヒントに、ロボット工学やセンサ工学の技術者が主体となるが、このとき認知科学や心理学の知識は不十分なため、開発の成功は技術者の能力にかかっている。
- ⑦ 人間がロボット開発に力を入れる理由は、人間が有するすべての能力をロボットに置き換えた後に、何も人間が行う仕事が残ることがないという環境を目指しているからであり、開発段階においてロボットの人間らしさの追究は必要とされていない。
- ⑧ メールゾフが考えた実験において、人間が棒を穴に差す様子を子供に見せた場合、子供はまねをするが、人間型ロボットを含む機械の場合まねをしないと結果になったのは、機械に人間らしさが失われていたからである。
- ⑨ 人間型ロボットを開発することは、工学的なシステム構築に基づく技術開発を高度化するだけではなく、その技術開発を認知科学、心理学と結びつける研究も含むため、人間を理解するための開発であるといえる。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問い(問1～12)に答えよ。(配点 50)

サルは一樣にマザコンである

家族を持つ、あるいは家族で暮らすということは、生活世界を「家のなか」と「家の外」に二分することを意味している。生活世界とは単に物理的な空間を指すわけではない。心理空間として、情緒的な結びつきを互いに求める私的な領域と、ひとりひとり社会のなかの一個人として交渉を持つ公的な領域とに分けられることにほかならない。

「家のなか」では、ふつう特定の人間同士が顔をつき合わせて生活する。他方、「家の外」では誰と遭遇し、誰と交渉を持つことになるかは予想がつかない。無限の出会いの可能性がひそんでいると言っても過言ではない。だからこそ、私たちの人生は予期できない展開を遂げていく。それだから楽しいし、怖くもある。

家族の外側での生活というのは、人間が社会生活を豊かなものにする上で必須の要因であるのだけれども、そればかりだと疲れる。そこで、情緒的な「いいい」を求めて、家族のもとへ帰ってくるわけである。そして生まれた子どもは、当面は家族と一緒に暮らしのみを続けるが、やがて外足を踏みだして、一人前になるとみなされる。これを

I という。

では、こういう観点から見た時、サルはどうかというと、やはり人間とかなり異なった生活をしている。なるほど彼らも、血のつながった母と子およびそのきょうだい以外の個体と集まって、集団(群れ)で暮らしている。だから社会生活をしていることを否定するのは難しそうに見える。

しかし彼らの一生というものをつぶさにたどってみると、生まれてこのかた、見知っている者同士のつき合いというものから脱却した新たな生活の可能性というのは、非常に乏しいことに気がつく。具体的にニホンザルのメスの場合、まず九分九厘まちがいなく生まれた集団で一生を終えるのである。また集団内部でも、自分の親、きょうだい、子とのつき合いにほとんど終始して、大半の時間を過ごす。

オスは少し異なる。自分の生まれた集団から離れることも少なくない。時として、リンセツする他の集団へ移ることもある。ただ、すべてのオスのうち、移出入する割合は決して多くない。また移る場合も、以前に自分の集団にいた面識のある仲間のもとへ移ることが多いと言われている。人間で言うと、分家した親戚を頼るようなものと言えるかもしれない。

しかも、こうした「移籍」すら、エサの乏しい野生群でないと生じにくい。つまり、いったん人間に餌づけされ、食物が豊富となるや、途端に出入りがとだえるのだ。ために観光地でサルが容易に見られるという所へ行つて、ボスザルの出自を尋ねてみたらよい。まずまちがいなく、生まれてこのかたその集団にずっとどまっているオスである。しかも母親が近くにはべつて

たどえ出自集団を離れたように見えたにせよ、実は近くを徘徊していることも多い。彼らは一樣に、親のそばにすることに恐ろしいほど強い執着を示すものである。離れないと生き続けるのが困難な状況下でのみ、フシヨウブシヨウ、外に出ていこうとする。

Ⅱ

「へ」という展開を一生のうちで持つことが稀である以上、そもそも「家族」という単位を認めることが難しい。母子の結びつきを家族とみなすのならば、集団全体が家族と言つても一向に差し支えないことになってしまう。そして、ここにずっとどまりたいと願う以

上、サルは、昨今の日本で何かと話題になることの多い「自立しない大人」とたいへん類似した人生を送っていることがわかるのである。もしそうした人間を便宜的に「マザコン」と総称するならば、

ア

と言っても過言ではないかもしれない。

### 「家の外」へ出ることの拒絶とルーズソックス<sup>(注)</sup>

われわれが、生物学的には霊長類の一種であるにもかかわらずサルと区分され得るのは、自己実現を遂げて人生を送るからではないだろうか。つまり、ひとりひとりが、その個人しかできないユニークな何かを達成して生活する。それには「家の外」へ足を踏みだすことが不可欠となる。

むろん、マザコンが一見自立した生活を営んでいる場合も珍しくない。ただ、こういう人間が問題視されるのは、ライフスタイルにおいて親のコピーの領域から脱却していないからにはかならない。人間にとって家族というものの意味は、「疲れたらいつでも帰っておいで」と言いつつ、家族外（すなわち社会）で活動するように励ますため、両者のあいだにサルにはなかった境界線をあえてはつきりと引いた点にそもそも由来するのだろう。そして、疲れた際にくつろげる所は、子ども時分からスキンシップを提供してくれた親のもとであるに違いない。しかし、くつろいでいるばかりでは話にならない。そこから外界へ乗りだしていく力を人間はさずからなくてはならないが、ではその源が何なのかは、サルとヒトに共通する子育ての特徴をいくら<sup>c</sup>チュウシュツしても明らかとはならないはず、という結論にいたる。

にもかかわらずこの半世紀のあいだ、育児を研究する科学者は、ひたすらスキンシップの重要性を唱えてきた。また現実には、少なくとも日本ではマザコンと総称してかまわない人間は以前より増加している印象を受ける。人間の子どもの発達の過程は、近年サルと類似する傾向をたどりつつあるように思えてならないのだ。

端的にそれは、女子高生に代表される一〇代の風俗に集約的に現れているように映る。例えば、平気で地べたに座ることや、屋外で平然とものを食べる行動。あるいは靴のかかとを踏みつぶして歩く「べた靴」現象。そしていつときリュウセイをきわめたルーズソックスである。

とりわけルーズソックスは、一世代上の私には、かなり奇異な代物であった。不格好だし、そもそも夏には暑くないのだろうか。ところが最近<sup>c</sup>、その真の機能にはたと気がついたのだ！

きっかけは、ホテルにチェックインし、部屋に入った際に見つけたスリッパだった。日本では、どんな欧米式の宿泊施設にも寝巻とスリッパが用意されている。そこに、「これは室内のみで御使用下さい」という注意書きが添えられているのを見つけたのだった。西洋式のホテルでは、一歩自室を出るや、廊下は公共の空間とされている。

そこで思ったのだが、「べた靴」というのは、スリッパで室内を歩く意識で外を歩き回りたいという思いの表出なのではないだろうか。日本人は家から外出するにあたり、靴をはく。でも「私は一日中『家のなか』感覚でいたい」という願望がかかたと踏みつぶす行動となって現れているとされるのだ。温泉地へ出かけ、リラックスするあまり、旅館の提供してくれた丹前とスリッパのまま外をうろつき回った、一昔前のあの雰囲気似ていなくもない。

そしてべた靴とルーズソックスは非常に関係が密である。試みに渋谷のザットウでカウントしてみると、かかとを踏んでいる女性一〇〇人のうち、九八%がルーズソックスを着用していた。試し

にルーズソックスをはいてみるとよくわかるのだけれども、生地が厚いので、外側に何をつけているのか感覚がない。こうすることで、一応靴をはくにせよ、それを体感せずにいられる点にその最大の機能があるという印象が強いのである。

公共空間に出ることを拒絶する——すると、地べた座りや戸外で平気で飲食することができるとも合点がいく。あるいは電車内で平然と化粧をしたり、ケータイで会話ができるのも……。

生活空間をあえて私的な領域と公的な領域に区分するということは、人間が恣意的に両者を分割する努力を怠ると、その境界は曖昧化することを意味しているのだ。その時、私たちは古くからの「なじみ」の深い者同士の、ぬるま湯のような心地よさにどっぷりと浸かっていた日常に明け暮れる快感に、強烈にミワクされるのかもしれない。それは母親とのスキンシップに充足していた日々へのキョウシユウと言ってもかまわないだろう。その系統的起源をニホンザルの母子に見ることができるとだ。

### 甲

ここ一〇年のあいだに、「ひきこもり」ということばはすっかり日本社会に定着した感がある。全国でその数は一〇〇万人以上にのぼるといふ試算もあり、中高生の二%が不登校であるとも言われている。一昔前なら、「社会的に無気力な状態に気持ちが悪く落ち込む」とでも表現するしか術がなかったこの現象は、拡大こそすれ、おさまる気配を全く見せていない。

典型的には、自分の部屋に鍵をかけて閉じこもり、外界と一切の交渉を断つ。食事も部屋まで持つてこさせ、自分ひとりですること珍しくない。昼夜のリズムが逆転し、昼間に寝て夜起きだして、テレビを見たりコンピュータゲームに興じたりする。

けれども「ひきこもっている」からと言って、犯罪者の予備軍とみなすのは全くの誤解にすぎない。ひきこもりの増加が犯罪率の増加につながったという証拠は全く存在しない。総じて日本の青少年の犯罪率は、欧米よりはるかに低い。

むしろ、だからと言って、ひきこもりを思春期にありがちな一過性の「心の揺らぎ」ととらえることは適切でない。それどころか、ひきこもりは決して若者全体の二%に限定して生じている現象ではない。むしろ反対で、ルーズソックスをはいたり、靴のかかとを踏みつぶしたり、地べたに平気で座ったり、歩きながら飲食をする者すべて、本質的には自分の部屋に鍵をかけて閉じこもる暮らしと変わらないように、私には映る。

両者に共通しているのは、「家のなか」すなわち私的空間から公共の場に出ることの拒絶である。「家のなか主義」とでも表現すべきスタイルだろう。異なるのは、個々の若者が「家のなか」の範囲をどれだけの広さと自己定義し、自分が活動する領域をどこまでとみなすかだけであって、いったんその縄張りを決定してしまうや、そこからなかなか足を踏みだそうとしない点では、双方とも見事に一致しているのである。

「ひきこもり」と呼ばれている人々（「ひきこもり系」と呼ぶことにしよう）は、自分の家のなかですら、「家の外」と認める空間があることが少なくない。もつとも極端な場合は自室のみを「家のなか」と把握し、その外へ出ることを拒む。親ですら、私的領域からは排除される、いわば

### Ⅲ

と化す。



他方、ルーズソックスに代表される「ふつう」の若者（「ルーズソックス系」と名づけよう）では、正反対に通常の空間（そこは、従来の大人にとって限られた私的空間と残りの広大な公共空間であるのだけれど）すべてにおいて、ひきこもり系の自室のような感覚でいられるのである。つまり、どこでもくつろげる。

ファーストフードショップへ行っても、自分と仲間たちだけで大騒ぎして楽しめる。居合わせた客はやはり **Ⅲ** である。ただ、ひきこもりと違って、他の客たちは店内のテーブルやイスと同じで、人であって人でない。人と認められるのは仲間だけなのだから。

ひきこもり系とルーズソックス系の差異をあえて挙げるならば、 **Ⅲ** の棲む異界（そこは通常の大人にとっては、いわゆる社会なのだが）を恐怖と感じるか、あるいは無感覚でいられるかという点にあるのかもしれない。結果として、前者はひとりでしか食事を摂れないし、後者は電車のなかでも平気で化粧をし、ケータイで会話することができるのだろう。では、なぜ一方は恐怖を覚え、一方は無感覚でいられるのか。

いずれの系に属する者にとっても、転機が思春期にやってくることは、おおよそのところ確実なようである。そのころを境にして、行動がおおのの系に特徴的な様相を帯びるのだ。思春期とは、すなわち自我の芽ばえるころである。

自我の芽ばえとは何かと言うと、それはまさに自分が自己実現を何らかの形で達成したいという欲望にかられることを指すと言いかえても、差し支えないだろう。そして自己実現を成すためには、「家の外」へ出かけていかなければならない。だが、そこには家のなかにはない軋轢がある。

軋轢は挫折を生む。家のなかでは望むままに通ったことが、外では適用しないことを知る。これにどう対応するかが分岐点となってくるのではないだろうか。

挫折した自分、あるいは自分で思い描いたように自己実現できない自分を許せないと否定的態度を取ったならば、ひきこもり系へ向かう確率が高くなる。反対に、思い通りにならなくとも、それは非が自分にあるわけではないと徹底的に居直り、「家の外」という環境までも「家のなか」とみなすことで今までどおりやっていきましようという態度を貫くと、ルーズソックス系に属するようになっていくのかもしれない。

正高信男「ケータイを持ったサル」（中央公論新社 2003年）

（注）ルーズソックス：ソックスの留め口にゴムを用いず、のりで素足に貼りつける、あるいは何もしないでだらしなく履くタイプの靴下。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は  ～  。

a リンセツ

b フシヨウブシヨウ

c チユウシユツ

d リユウセイ

e ザットウ

f ミワク

g キヨウシユウ

問2 空欄

に入る語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解

解答番号は  。

① 融合化

② 社会化

③ 成人化

④ 家族化

⑤ 集団化

⑥ 個人化

問3 空欄

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は  。

① 母の元

② 家族の一員

③ 社会の外側

④ ボスの元

⑤ 孤独化

⑥ 家の外

問4

空欄

に入る語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解

解答番号は  。

① 管理人

② 民間人

③ 社会人

④ 異邦人

⑤ 管財人

⑥ 極悪人



問5 空欄

ア

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- ① 人間とサルの両義性はこの範疇はんちゆうにない
- ② 人間とサルの均一性はこの範疇にある
- ③ 人間の多様性はこの範囲に含まれる
- ④ 人間の一義性はこの範囲外に存する
- ⑤ サルは一樣にこの範疇に含まれる
- ⑥ サルの多様さはこの範囲に含まれる

問6 傍線部A「母親が近くにはべっている」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 観光地にいるサルがボスになるには、母親離れていないことが条件であるから。
- ② 観光地にいるサルは餌の獲得がうまく、オス・メスともに群れを離れられないから。
- ③ メスのサルは生まれてから、群れを離れて新生活を送る可能性が極めて低いから。
- ④ メスのサルは出自集団を離れたように見えても実際は近くにいることが多いから。
- ⑤ 観光地にいるオスサルは出自集団を率いて、新生活を送るための場所を探るから。
- ⑥ メスのサルは親のそばにいることに恐ろしいほどの強い執着心を示すものだから。

問7 傍線部B「両者のあいだにサルにはなかった境界線をあえてはつきりと引いた点」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 親子であつてもそれぞれの自我があることを理解し合い、お互いに尊重しなければならぬ最低限の境界線をサルが持つていないということ。
- ② 家庭は「いこい」を得るために帰る場所、家庭外は他者と休息する場所であるということ。
- ③ 人間の子は、親のコピーの領域から脱却していくことを目指すために親と別居するというライフスタイル上の境界線を引くが、この境界線をサルは持つていないということ。
- ④ 「家のなか」と「家の外」とに生活空間を区別することは、人間が無意識に保持している境界であるが、サルは意識しなければそれを保持できないということ。
- ⑤ 人間は意識して生活空間を私的な領域と公的な領域とに区分しているのに対して、サルは領域を分ける境界線を持たないということ。
- ⑥ 生活世界に含まれる情緒的な結びつきを互いに求める私的な領域と、自分が社会の中心であるという公的な領域は、人間が意図して区別しているもので、サルにはないということ。

問8 傍線部C「その真の機能」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① ルーズソックスには、スリッパで室内を歩く意識で外を歩き回りたいという女子大生の思いを表出する機能があるということ。
- ② 昼夜の生活リズムを逆転させ、外界との交渉を一切断ち、自分が世界の中心であることを認識させるような機能がルーズソックスにあるということ。
- ③ ルーズソックスには、我々が自宅から出かけた時に「私は一日中『家のなか』感覚でいたい」ということを周囲に知らしめるような機能があるということ。
- ④ ルーズソックスと「べた靴」はともに、欧米のホテルなどの公共空間においても通用する実用的な機能を持っているということ。
- ⑤ ルーズソックスは生地が厚く何かをはいているという感覚がないため、外出先でも自宅と同様に過ごせるような機能を有しているということ。
- ⑥ ルーズソックスには、「家のなか」と「家の外」との区別を曖昧にし、家族と一緒に生活しているような感覚を持たせる機能があるということ。

問9 傍線部D「その」の内容として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 人が「なじみ」の深い者同士との心地よい日常に惹かれてしまうこと
- ② サルの親子に見られるように人間同士の関係が曖昧化してしまうこと
- ③ 成長したサルが人と同様にマザコンに強烈な快楽を覚えてしまうこと
- ④ 人が母とのスキンシップに満足していた幼少時を想起してしまうこと
- ⑤ 人の子の成長過程とサルの子のそれが近づき始めてしまうこと
- ⑥ サルたちが私的空間から公的空間へ周囲の環境を改善してしまうこと

問10 傍線部E「双方とも見事に一致している」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 「ひきこもり系」も「ルーズソックス系」も自分の生活領域を他者によって決定されてしまうと、その限られた範囲の中で生活するという点で一致しているということ。
- ② 個々人が自分の生活範囲についてどれだけの広さであるかを決定したうえで、自分の活動領域をどこまで広げることができるかという思考はサルと一致しているということ。
- ③ 「ひきこもり系」も「ルーズソックス系」も自分の生活領域を決めてしまうと、そこから出て行くことを拒絶してしまうという点で一致しているということ。
- ④ 人間もサルも集団の中における自己の領域を決定してしまうと、その領域から思い切っ出ていくことを拒絶してしまうという点で一致しているということ。
- ⑤ 「ひきこもり系」も「ルーズソックス系」も仲間と見ているのは私的領域にいる家族同様の人であり、それ以外の場にいる人に相手にされない点で一致しているということ。
- ⑥ 個々人が自分の活動領域を交友関係の広さに基づいて決定するという思考は、サルの世界観と一致しているということ。

問11 空欄 甲

から一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 「ひきこもり」と靴下
- ② 公共の場における生活
- ③ 思春期特有の精神的転換
- ④ 社会生活と「ひきこもり」
- ⑤ 公的領域の縮小と社会生活
- ⑥ 「家のなか主義」と世界
- ⑦ 「ひきこもり」の本質
- ⑧ 自我の芽ばえと挫折

問12

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

37

38

- ① サルは人間と異なり、血のつながった母と子およびそのきょうだい以外の個体と集まって、集団で生活していることから社会生活をしているとみなすことはできないが、人間の生活スタイルの進化形が見られる点で興味深いものである。
- ② 人間がサルと区分され得るのは、ひとりひとりにしかできないユニークな何かを達成するために「家の外」へ足を踏みだし、社会活動をおしてすべての人間が親のコピーの領域から脱却しようとするライフスタイルを構築している点にある。
- ③ 育児を研究する科学者が母子のスキンシップの重要性を唱えてきたにもかかわらず、日本でマザコンと総称し得るような人間が以前より増加しているのは、人間の子どもの発達過程が、サルとは相反する傾向をたどっているからである。
- ④ 「ひきこもり」は若年層から老年層へと日本社会に広がり、その数も日本全国で一〇〇万人以上いるという試算がなされるまでになったが、これは単に生活リズムが昼夜逆転した生活を送るだけであって、実質の人数はそれほど多いものではない。
- ⑤ ひきこもり系とルーズソックス系のどちらも転機は思春期にあるが、この背景には「家の外」へ出て社会に貢献するための自己実現を何らかの形で達成したいという欲望を持つことに対する軋轢がある。
- ⑥ ひきこもり系とルーズソックス系では、社会に対して恐怖と感ずるか、あるいは無感でいられるかという点に差異があり、前者は電車のなかでも周囲を気にせずケータイで会話でき、後者はひとりでしか食事を摂れないということになる。
- ⑦ 一日中「家のなか」にいる感覚でいたいという願望がかかるとを踏みつぶす行動となって現れるが、これは温泉地で旅館が提供してくれた丹前とスリッパのまま外を出歩いた、一昔前の雰囲気似ているともいえる。
- ⑧ オスのサルは自分の生まれた集団から頻繁に離れ、場合によっては自分がいた集団を攻撃することもあるが、このようなことはエサの乏しい野生群でないと生じにくく、人間に餌づけされるなど、食物が豊富にある場合には集団を離れることはなくなる。
- ⑨ 「家のなか」では、決まった人間同士が顔を合わせて生活する一方、「家の外」では予想できない出会いがあり、このことが人間の社会生活を豊かにする上で欠くことのできない要因の一つとなっている。